若者のUターンから災害復興へ──高科大・楠西青年駐在ワークステーション計画

楊雅玲 国立高雄科技大学 文化創意産業学系・准教授 yamuna@nkust.edu.tw
王藝蓁 台南応用科技大学 商品デザイン学系・助教授 te0070@mail.tut.edu.tw
葉冠宏 国立高雄科技大学 文化創意産業研究所・大学院生 airily@nkust.edu.tw
江佳泓 国立高雄師範大学 客家文化研究所・修士 neil28389@gmail.com
周東森 国立高雄科技大学 文化創意産業研究所・修士 bubblsweet@yahoo.com.tw

1、 序論：大地震が結んだ出会い

マグニチュード6.4の強震が1月21日に発生し、楠西では深刻な被害が出ていた。多くの住宅に修繕対応が求められており、道端には再建用の砂利が積まれていた。雲から差し込んだ日差しと共に、多くの若者を乗せたバスがゆっくりと農村へと入っていった。一行は国立高雄科技大学(以下、高科大)応用日本語学科と日本の福岡工業大学の教員・学生で、彼らは「地方創生研修」プログラムを行なっており、楠西の再生計画に対して関心と好奇心を持っている。

彼らはまず「安心インドナツメ園」を訪れ、わずかに残ったインドナツメを手に取った。林一夫氏の説明により、震災の影響でインドナツメは早期収穫となったことを知り、有機栽培の農作業が体験できた。その後、一行は「楠西コミュニティ発展協会」を訪問し、鍾清蘭理事長やボランティアの方々から温かく歓迎された。ちなみに、同協会は被災地に位置しながらも、なお被災者へ温かい食事や物資の提供を続けているため、台湾の衛生福利部に2025年度「コミュニティ金点賞」にノミネートされた。

昼食は「果農の家」農園で楠西産の果物を使った料理を堪能した。同農園の経営者江仲緯氏は林一夫氏と同じくUターン者の代表で、近年地方創生事業に積極的に取り組んでいる。午後には約300年の歴史を有する「鹿陶洋江氏古宅（集落）」を訪問した。集落にある古い住宅は百年以上の歴史を誇っている。その多くが地震により甚大な被害を受けたが、鹿田里の黄漢威里長の案内により、代々受け継がれてきた江氏一族の栄光を偲ぶことができた。

図1　福岡工業大学の一行の楠西・安心インドナツメ園訪問

今回の見学ミニツアーでは、地元の住民がお茶・果物・笑顔で遠方からの来訪者ををもてなしてくれた。こうした交流は言葉の壁を越えて、台湾と日本の若者に楠西住民の復興に向けたレジリエンスに深い感銘を与えた。若者も復興の進行を切に祈願した。

2、　計画の説明：青年の駐在が、地域に新たな声をもたらす

今回の「地方創生研修」プログラムを受け入れた時点で、本計画チームの駐在活動はちょうど3か月目に入っていた。本チームが企画した「楠西再生ミニツアー」には多くのメディアが同行取材を行ったため、楠西住民は大いに励まされた。

本研究の執筆者ら（以下、本チーム）は、台南市政府客家事務委員会（以下、台南客委会）から委託を受け、2024年12月より「台南原郷客家集落青年駐在ワークステーション」計画（以下、ワークステーション）を行なっている。楠西区の客家人は、区全体人口の約7％を占めており、そのルーツは清朝統治期までさかのぼる。清早期に中国から海を渡って台湾に定住した移民もあれば、清末期から日本統治初期にかけての第2波・第3波移民に由来する者である。

世代を重ねるなかで、客家の言語と文化は次第に閩南社会の影響を受け、変容していった。現在、多くの家庭では客家の年中祭祀や礼儀・風俗が保持されているが、若い世代が客家語でコミュニケーションを取れなくでなっている。

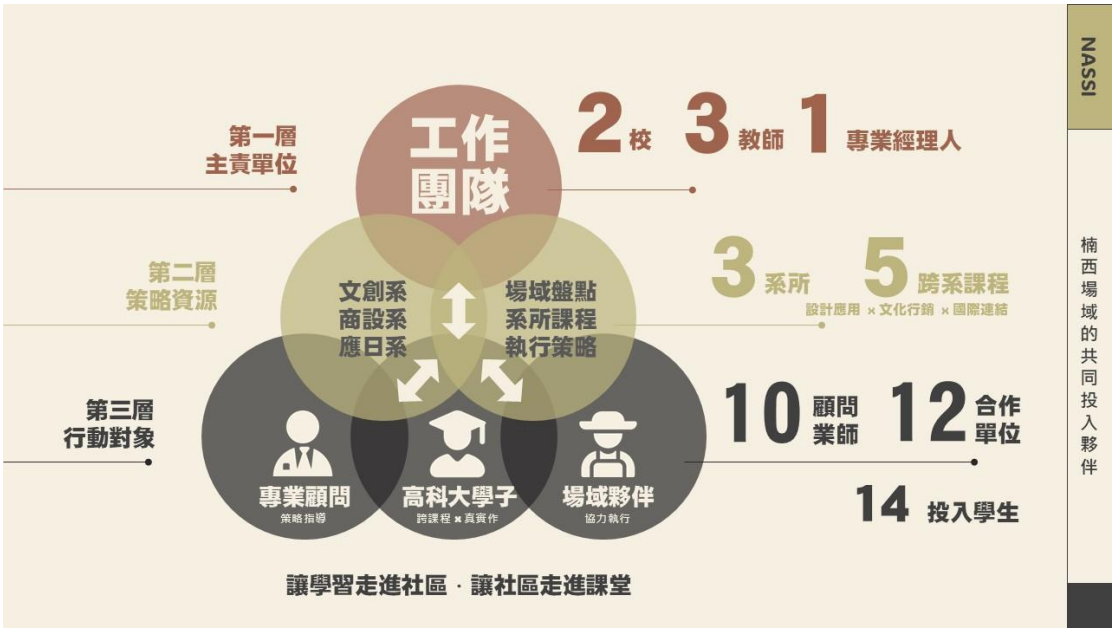

図2　計画チームの構成

2022年9月、行政院客家委員会は「族群主流化」政策に応じて、客家の血統を継いでも閩南語を話す人々を「客底」と明確に命名し、学術機関に「客底文化発展計画」の実行を委託した。

「鹿陶洋江氏古宅」は台南・楠西における客底文化の最たる代表である。台湾に現存する客家集落の中で、同が最大の規模を誇り、最も由緒ある集落と言える。同「古宅」はきちんとした建物配置と奥行きのある院落構造を有しており、その祭祀・風俗・食文化・建築様式から客家文化が感じ取ることができる。なかでも、「吃公（チィーコン）」文化は地域の重要な精神的象徴となっている。

このような歴史的・文化的背景のもとに、ワークステーションの設立は単なる文化調査の延長ではなく、若い世代の視点に基づいた地域行動として位置づけられている。計画の目的は、駐在員の支援と共学の実践により、若い世代が客家文化の主体性に対して誇りを持たせる同時に、地域の特色産業・コミュニティ組織・人材をつないで文化再生に向けた行動力を生み出すことである。

3、　大地震による楠西の被災：現状の把握と再生

本チームは計画目標を明確に定めて駐在を開始したばかりの1か月後に、楠西はマグニチュード6.4の強震に見舞われた。人的被害はなかったものの、住宅の過半数が壊れていた。前述の鹿陶洋江氏古宅も例外ではなかったため、地元の発展にとって大きな打撃であった。

台南市長の黄偉哲氏は頼清徳総統および客家委員会の古秀妃主任委員に同行して現地を視察し、中央と地方の連携によって迅速に修復を完成させ、古宅の元の様子を守るべきだと強調した。この地震は建物を壊しただけでなく、辺地である楠西の課題——人口の高齢化と古い家屋の立ち腐れが共になす「二重の老い」——を改めて呈している。その後、多くの若者が高齢の家族を介護するために、一時的に親族を他地域へ移し避難させた。したがって、密接であった近隣関係が薄れて再建の力も弱まった。

以上をふまえて、駐在ワークステーションの起用は至急になっている。本チームはコミュニティに入ってから、最初に急いで復旧に取りかかるというより、いち早く壊れていた建物の現況を把握し、利用可能な地域資源を整理した。また、当地に留まり共に行動したがっていた住民や、地域団体の幹部を結集することができた。つまり、この「把握」は単なるデータ収集ではなく、現地の実情に向き合い、問題解決に取り組む行動である。

4、 見学ミニツアー：災後の楠西を再び可視化するために

楠西の再生は、単なる修復作業を意味するだけではなく、地域の関係者が集まって行動し出す契機でもあった。ワークステーションの設立初期に、本チームは幾度も専門家・顧問の学者らの協力を得て、現地踏査および学生の実地調査を行うとともに、鹿田里里オフィス・楠西商店街発展協会・祭祀公業法人・台南市江達清・「果農の家」（国家発展委員会「森果川自造所–地方創生青年育成ワークステーション」運営チーム）・楠西社区発展協会などの団体と、協働関係および今後の運営モデルを確認した。複数回の会議や対話を交わしてこそ、「復興」は文字にとどまらず、地域における共学と協働が順調に始動できるわけであった。

台南客委会の指導のもと、本チームは「楠西再生見学ミニツアー」の企画を開始した。これは従来の観光イベントとは異なっている。参加者が被災地の訪問を通して、住民が「生活」と「生計」の間でどのように均衡を取っているのかを理解し、社会デザインの実践に加わることが目的である。また、この企画の更なる発展として、産・官・学・民の力を統合して、楠西が未来に向けて持続可能な農村へ転換することがあげられる。

本チームは、高科大国際事務処、応用日本語学科の黄愛玲准教授・陳志坪助教授、台南応用科技大学商品デザイン学科の王藝蓁助教授の協力を得て、2025年3月8日には藤井洋次教授が率いた福岡工業大学訪問団、同年9月7日には田上智宜准教授が率いる熊本学園大学訪問団を楠西に招待した。訪問者は、江氏古宅の復旧プロセスの説明を受けたほか、楠西社区発展協会で高齢者とともに手作り・共学活動を体験した。また、Uターン者の代表である江仲緯氏の運営する「果農の家」で、地元産の

果物を活かした料理を堪能した。このような食事は地方の風味をもってもてなすだけでなく、国境を越えた理解と友情をも結びつける場となった。

福岡工業大学訪問団は楠西特産のインドナツメの収穫期に訪問したため、全国百大若手農家に選ばれた林一夫氏の「安心インドナツメ園」を見学し、無農薬のインドナツメを堪能した。同訪問団の藤井洋次教授は社会環境学部に所属しており、日本でも農家の構造転換の支援に多く携わってきた。藤井教授は、Uターンした林氏が父が20年以上守ってきたインドナツメ園を更新し、生産履歴の上位版である「TGAP PLUS」認証を取得し、良好な農業規範・労働安全・食品安全・持続可能性など高い基準を求める姿勢に深く感銘を受けたという。

図3　江氏古宅で成功大学の視察団と偶然出会い、四大学がそろった貴重な記念写真

図4　日本の学生が楠西・赤靈宮で「月老（ユェラオ）参拝」を体験

熊本学園大学訪問団が楠西を訪れた際、インドナツメの収穫はすでに終了していた。一行は「玉井之門」ドライフルーツ会社を訪れることにした。「玉井之門」は本部を楠西に構えており、楠西商店街発展協会のメンバーのためである。同会社では訪問団のためにさまざまな天然かつヘルシーなドライフルーツを提供し、試食会を催した。Uターン者かつ二代目経営者である蔡明寰氏は、「玉井之門」は2000年に両親が創立したという。また、蔡氏によれば、両親は防腐剤・添加剤を使用せずに、手作業かつ低温で脱水する加工法を用いて、ドライフルーツが果物本来の香りと甘みを保有しているよう心掛けている。蔡氏が事業を引き継いだ後は、EC（電子商取引）チャネルを開設したり、自分の機械工学に関する専門知識を活かしてドライマンゴーの加工プロセスを改良し、グリーンエネルギーを利用する脱水加工法に転換したりして、果物の副産物の再利用についても研究している。

熊本学園大学の田上智宜准教授は専門領域が台湾の地域研究のため、これまで台湾各地にある多くの農村を訪れてきた。田上教授は、楠西では大地震により多くの住宅が壊れており、果園で大量の落果が発生したにもかかわらず、若い世代の経営者たちが再建に懸命に取り組み、未来に対して強い信念を持っていることを評価し、地方創生の良い事例として見学に値すると語った。

この「見学ミニツアー」は豪華な観光プログラムではないが、地震後の楠西を新しい視点で見る契機を作るツアーである点に価値があると言える。住民はもはや被災者だけでは

なく、地元の主人公となっている。若い世代も支援者だけではなく、地方再生の推進者となっている。まさに台南客委会の陳新裕主任委員が述べるように、「毎回の温かみのあるツアーが、世界に楠西を見せる機会である。」今回、楠西の皆さんは地震後に再び立ち上がる姿で人々の視野に入っている。

図5　訪問団の学生が地域の手作りワークショップに参加

5、　楠西訪問に関するフィードバック

台南市客委会の陳主任委員は、高科大応用日本語学科の教員・学生が福岡工業大学および熊本学園大学の師生を伴って楠西を訪問したことに深く感謝の意を示した。日本では地方創生が十数年にわたり推進されており、多くの成功事例がある。そのため、日本訪問団の観察を通じて、今再建の期間にある楠西に「ツアープログラムの企画」に関して貴重な指摘が可能となった。また、江氏古宅のガイドツアー・秘境月老公参拝（楠西密枝里赤靈宮）・楠西百果風味の食事（果農の家）・地域体験型の手作りワークショップ（楠西社区発展協会）・初物および良質な加工食品の購入（安心インドナツメ園・玉井之門）といったプログラムは、楠西における文化景観と地方創生事業の多様性を示している。

高科大応用日本語学科の黄愛玲教授は、福岡工業大学の楠西訪問の翌日に、

同学科で1日「交流ワークショップ」を開催し、両校の学生に訪問の感想と自分の提案を発表させるようにした。黄教授は、この貴重な訪問機会を通じて、師生が楠西の生活環境や人文的風景を直接体験できたと言った。両国にある多くの農村と同様に、楠西も高齢化に直面している。しかし、一同の感想をまとめると、楠西の住民は地震の影響を受けたにもかかわらず、その一人一人の活力に満ちている様子が最も印象的であったという。

さらに、今回は日本の学生にとって台湾の高齢者の明るさと活力を感じ取れる機会であったと、黄教授は日本の若者に対する観察を語った。なぜかと言えば、多くの日本高齢者は台湾のそれと異なり、「過度な干渉」と責められることを恐れ、自己を閉ざして社会的孤立を感じているという。このようにお互いに勉強になることこそ、日台交流の最も有意義なところであると黄教授は考えている。

応用日本語学科の陳志坪助教授は、「果農の家」の経営事例に印象深いと述べた。専門が経済学の陳助教授の分析を次のようにまとめている。原料供給を主に向けた伝統的な農業とは異なり、同会社は「ブランド化・加工化・流通化」を中核に現代的な企業経営のマインドセットを導入した典型的事例である。江仲緯氏は家族果園を引き継いだ際、従来の栽培・収穫・納品の方式には頼らず、生産から加工・包装・展示・マーケティングまで一貫した「産地から商品まで」のバリューチェーンをマッピングしている。

陳は以上をふまえて、「果農の家」が一次産業（生産）・二次産業（加工）・三次産業（販売・サービス）を段階的に結びつけ、いわゆる「六次産業化」のモデルを形成していると評価している。農家自らがこのように生産チェーンを掌握する方法は、収益向上のためだけでなく、農業を「受動的な供給者」から「能動的な市場参加者」へと変化させるものである。陳はこのモデルが台湾農業の構造転換において重要な示唆を与えるという。つまり、多様な価値を創出することで、農業が魅力的かつ持続可能な産業となりうるとのことである。

本チームも、楠西の住民が「地域ブランド」の形成・転換を求める欲求を感じている。楠西において、地域ブランドはもはや二次産業的な美しい包装ではなく、ビジュアルアイデンティティを通して青年とコミュニティがともに創り出した成果が反映されたものである。また、楠西は地域の物語や感情価値を伝えることができることにより、さらに地域イメージが向上させ、より多くの若者にUターンする意向を持たせるようにしている。本チームからすれば、楠西では地域特色を生かした産業への関与の可能性が示されており、持続可能な創意生態系が形成されていくだろう。

6、 合意形成と地方創生：楠西の発展ビジョン

前期の現況把握と国際交流を経て、楠西の復興は徐々に「行動」から「対話」へと展開していった。2025年5月29日、本チームは台南市政府客家事務委員会の関係者・楠西区長の何榮長氏・地域の関係者・本計画の専門家と顧問の学者を招き、「趣淘漫旅」ホテル会議室で「楠西合意形成の会」を開催した。これは地震後に初の部門や世代を越えた正式な議論の場であり、現状を整理しつつ、今後の地方創生のビジョンを共同で描くことを目的としたものである。

参加者は「どのように復興と創生を両立させるか」を主題に、活発な意見交換を行なった。現状の修復状況の確認にとどまらず、今後の活動につながる幅広い提案も出された。会議の中では、特に多くの地域関係者が「1泊2日」の深度体験型プログラムを整備することで、観光客が楠西に滞在して地域の魅力を深く味わえる仕組みを作りたいとの意向を示した。宿泊事業者もそれぞれの特色に沿って構想を共有した。列席の業者は、何鈺霖CEOチームが運営する「高品質楠西民宿」・曾文ダム公園敷地内の「趣淘漫旅」ホテル・梅嶺エリアで認証された唯一のキャンプ場「神秘気場キャンプ場」（台南市キャンプ協会林明賢理事長運営）・亀丹温泉エリアの特色民宿などが挙げられる。参加者全員が、今後は「受動的な予約待ち」から「能動的な観光プログラムの企画」へ転換し、地域全体の資源を統合しなが楠西区をマーケティングし、観光による地域経済を活性化を目指すべきだとの認識を共有した。

この会議は、各界のコミュニケーションを促進するとともに、被災後の共通認識を形成する契機となった。地方創生は復興の副次的な要素ではなく、被災後の生活再建の出発点である。会議では多くの住民が初めて自らの構想を提案し、コミュニティガイドの推進・地域ブランド商品の開発・文化活動によるコミュニティの絆の再構築など、多様なアイデアが示された。

同時に、本チームでは以下の地域団体の提案書作成を支援し、中央政府からの支援資源の獲得に成功した。それにより、地域の取り組みは継続的に発展する基盤を得ることができた。

1. 楠西コミュニティ発展協会：文化部推進のコミュニティづくりおよび村落文化補助計画「楠西シェアキッチン：被災後の復興から文化によるエンパワメントへ」（実施中）。
2. 国立高雄科技大学校内USRパイロットプロジェクト（教育部）：「楠西再創造：歌でコミュニティを守る」（実施中）。

これらのプロジェクトが進むことで、災後復興は「ハード面での修復」から「文化・精神

面の再生」へと広がりを見せている。ひいては、地域組織は提案書の作成・協働・マネジメントなどの実践的なスキルを身に付け、若者も活動において自らの専門・能力を発揮する機会を得た。

合意形成の会は議論の終着点ではなく、新たな地方創生の始まりである。ある参加者が述べたように、「私たちは再建しているのは住宅ではなく、互いのつながりなのだ。」その言葉とおり、楠西の再生の姿は徐々に形を成し、地域発の将来像が人々の協働によって描かれはじめている。

付録：メディア掲載記事（抜粋）

自由時報　2025年3月8日 「インドナツメを賞味し、古宅を訪れ、コミュニティづくりを体験 日本の大学生が楠西災害地域を訪問する見学ミニツアー」https://reurl.cc/86rKOj

自由時報 2025年9月7日「台日若者が台南・楠西に集結　地方創生の旅を展開」https://reurl.cc/4badnK